

令和7年11月21日

# お知らせ

	文化振興課	PORT ART &DESIGN TSUYAMA
担当	藤原・渡部	飯綱
内線	3145・3146	—
直通電話	086-226-7903	0868-20-1682

## 高山夏希展「モノたちの記憶、あかくなる結節点」 【文化芸術の力を活用した地域のにぎわい創出事業】

岡山県では、地域との連携・協働により、地域の多様な文化芸術資源を活用して、地域の魅力や価値を高め、地域を元気にするとともに、県民の皆さまに対して優れた文化芸術に触れる機会を提供する「文化芸術の力を活用した地域のにぎわい創出事業」を実施しています。

本事業の一つとして、「モノたちの記憶、あかくなる結節点」を、次のとおり開催しますので、お知らせします。

### 記

#### 1 概要

本展示では、個々に受け継がれた家財道具や、住まう家の一部だったモノ、衣服、道具など私たちの周囲にある身近なモノを素材としながら、渾然一体となった空間をつくりだします。そうして収集した物を、立体作品として制作し、インスタレーションの一部として構成していきます。そうして持ち主と物の持つこれまでの過去の時間と、作品として生まれ変わった現在、それぞれの場所と会場を繋げることを試みます。

#### 2 場所

PORT ART&DESIGN TSUYAMA (津山市川崎823)

#### 3 期間

令和7年11月29日(土)～12月21日(日)

10:00～18:00 (入館は17:30まで ※最終日は16:30閉館)

火曜休館

#### 4 料金

無料

#### 5 ギャラリートーク

つやま自然のふしぎ館の館長・森本信一氏、奈義町現代美術館学芸員・遠山健一朗氏をお迎えし、アーティストの高山夏希とともに、「古物と記憶」について、語り合います。

##### (1) 日時

令和7年12月21日(日) 14:00～15:30

##### (2) 場所

PORT ART&DESIGN TSUYAMA (津山市川崎823)

##### (3) その他

参加費無料／予約優先(定員20名)

※詳細は、別添のチラシを参照ください。

「モノたちの記憶、

あかくなる結節点」



Memories of Things, The redal prints turn red  
Takayama Natsuki Exhibition



ARTIST 高山夏希 / Natsuki Takayama

1990年東京生まれ。平面作品を中心に、粒子の感触を確かめるように人間と物質の関係の再考を試み、人・動物・モノ・環境などが一体性をもった自然観を表現している。情報技術の発達によって記号化されたものの結びつきは強まったが、他方で記号化未満の事物への感性は弱まってしまっているのではないだろうか。それによって周囲を取り巻くものに対しての実感が薄れてしまっているように感じている。こうした時代の中で失われてしまった様々な物体と人間の関係の回復を試みるように、近代的な世界観とは異なる、人間を含めた生物と自然が一体化した世界観を提示している。私たち自身が、絡まり合った世界の一部として生きる事を再認識する事によって、現代の人間の生を再考できるのではないだろうかと考えている。アクリル絵の具を流れる粒子のように物質的な状態として扱い、積層して彫刻刀やカッターの刃などを用いて削り出すなど、平面を主な媒体としながら、触覚的あるいは彫刻的ともいえる手法を用いて制作をしている。

主な展覧会 「まだかたちのない形相体」(東京アートミュージアム /2025年)「堆く、石走りて」(rin art association/2023年)「気色の目」(奈義町現代美術館 /2023年)「房総里山芸術祭 × いちはらアート × ミックス 2020+」 「conjunction - 名詞から接続詞へ -」(白鳥保育所 /2021年) 「VOCA展 2020 現代美術の野望 - 新しい平面の作家たち -」(上野の森美術館 /2020年) などアートプロジェクトや展示に多数参加

GALLERY TALK 12月21日(日) 14:00-15:30 場所: PORT ART&DESIGN TSUYAMA



高山夏希  
アーティスト



森本信一  
つやま自然のふしぎ館



遠山健一郎  
奈義町現代美術館 学芸員

つやま自然のふしぎ館(津山科学教育博物館)の館長・森本信一さん、奈義町現代美術館学芸員・遠山健一郎をお迎えし、アーティストの高山夏希とともに、「古物と記憶」について語り合います。展覧会を通じて、古物や残されたモノの価値、そして未来に繋いでいく意味について、館長との貴重な対話を展開します。本展や博物館の古物(美術館の作品)、残されたモノにまつわる物語、私たちの生活の中に息づく「残していくモノ」について深く掘り下げるこの絶好の機会をお見逃しなく。

参加費無料/予約優先(定員20名) ※当館まで電話またはメールでご連絡ください。  
Tel..... 0868-20-1682 Mail..... info@port-tsuyama.com ※代表者氏名、参加人数、電話番号をお知らせください。

同時開催 津山高校美術部「モノと記憶で生成する現在」

津山高校美術部の生徒たちと4日間のワークショップを実施しました。生徒たちの「モノと記憶で生成する現在」をテーマに制作した作品を展示します。家の中に大切に残る古物を持参し、失われつつある「事物」への感性を育むとともに、それらに宿る記憶や時間を想像しながら制作活動を行いました。また、グループディスカッションを通じて、生徒同士が共有した思いや物語が、新しい視点や想像力へと深化した作品になっています。ぜひ、ご覧ください。



PORT ART&DESIGN TSUYAMA  
〒708-0841 岡山県津山市市川崎 823  
Tel.0868-20-1682 info@port-tsuyama.com



・駐車場: 専用駐車場5台(当館から西へ100m)  
・臨時駐車場: 津山東公民館の白線のない南側フリースペース  
※本館隣「マンション東松原」駐車場のご利用はご遠慮ください

指定管理者: EKG 合同会社 (代表 飯網洋平) HP: <https://www.port-tsuyama.com>

2025.11/29 sat — 12/21 sun

10:00—18:00 (最終入館は17:30まで) 火曜休館  
※最終日は16:30閉館

[ギャラリートーク] 12/21 sun 14:00—15:30

高山夏希、森本信一(つやま自然のふしぎ館)、遠山健一郎(奈義町現代美術館 学芸員)

同時開催  
「モノと記憶で生成する現在」  
津山高校美術部



## 「モノたちの記憶、

### あかくなる結節点」

この度、PORT ART&DESIGN TSUYAMA 2017、高山夏希の個展「モノたちの記憶、あかくなる結節点」を開催させて頂く運びとなりました。

展示会場である PORT ART&DESIGN TSUYAMA

「ポートアート&デザイン津山」(以下PORT)のある建物は、大正9年(1920)に竣工し旧妹尾銀行林田支店として創建し、その後は津山洋学資料館として市民の方々に親しまれる場所でした。平成30年(2018)には新たに芸術文化の創造・発信拠点として整備され、市民へと開かれた場所ともなっています。

私が会場に訪れた際に、つよく印象に残ったのは、100年以上もこの場所が残りがちな中、人々が今もなお集まり、展示会・コーヒースタンド・イベント会場・ワーキングスペース・図書コーナーなど、その場所に訪れる人々とともに、建物の活用の仕方が変化し続けていることです。そうした変化とは相反して、建物として残されてきた古い意匠とその背景があり、変化と持続の両義性のある場所で、私は建築空間を環境としたインスタレーションを制作したいと考えました。また、このようにして活用される場所の特性を活かし、鑑賞者となる近隣の人々が、会場まで行き来する道筋も含めて展示会に取り込みたいと考えたのです。

PORTの位置する城東地区や、それらをつなぐ出雲街道沿いの方々を対象に、不要になったが捨てられずにいる古物を収集し、その物への思い入れをヒヤリングするところから私は制作をはじめました。誰も人には代々受け継いで

事物など、個人の環境や背景が刻まれているモノがあると思っています。そうしたモノを処分せずに、作品の素材として提供してもらい、再び息を吹き込みたいのです。

現代の技術が情報化の中で、紙媒体がデジタルデータ化され、電子機器一つに電話も地図も計算も時計も集約され、身軽になり便利になりましたが、事物への感性が薄れてしまっているように私は感じています。そうした中で、失われつつある物を受け継ぎ、美術を通じてもう一度、事物への感性や想像力を呼び起こすことができるのではないのでしょうか。この地域に眠っていた家財を用いて、新たな形へと生成することで、様々な物体と人間の関係の回復を試みることに。これによって、近代化する一方で失われつつある事物への強い私的な思い入れを作品に取り込むことができるのではないかと考えています。

本展示では、個々に受け継がれた家財道具や、住まう家の一部だったモノ、衣服、道具など私たちの周囲にある身近なモノを素材としながら、渾然一体となった空間をつくりだします。そうして収集した物を、立体作品として制作し、インスタレーションの一部として構成していくのです。そうして持ち主と物の持つこれまでの過去の時間と、作品として生まれ変わった現在、それぞれの場所と会場とを繋げることを試みます。私にとって、作品素材を提供して下さる方々との交流を通じた新たな制作の試みになります。制作を通じて不要になった物が新たな姿へと形成し、その物の行く末(もしくは、それによって新たな役割を果たす)を問う実験的な制作でもあります。資源が使い捨てになっている中で、物を作ることに疑問を持たれる時代ですが、機能性や利便性といった合理的な理由づけで物を扱うのではなく、別な想像力を働かせることで、薄れつつある事物への感性の回復や、私たちの周囲に取り巻くモノたちに対する実感を再考できるのではないかと考えています。

高山夏希

